

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2016.3) 16:99-100.

第30回 日本生体磁気学会を終えて

鎌田 恭輔

学界の動向

第 30 回日本生体磁気学会を終えて

鎌 田 恭 輔*

本学会は柿木隆介理事長のもと、医学部と工学部が交互で大会長をするシステムになっていました。2年前に臨床系の大会長を選ぶ段階で突然かつての工学部の恩師から“旭川でやろう”との鶴の一声で、大会長に指名されました。この学会は脳磁図、心磁図、磁気計測デバイス、磁気が生体への影響、神経生理学など様々な分野が融合しているため、プログラムの作成が困難を極めました。なんとか100題ほどの演題が集まりました。今回のプログラムは事務局長の三井直幸先生と、旭川医科大学教育研究推進センターの竹内文也先生の多大なる労力のおかげで、“生体磁気の新技術”、“可塑性と神経科学”、“心磁図の臨床応用”、さらに“てんかん診断への脳磁図応用 (English session)”を組み合わせることができました。神経科学、臨床医学、工学のバランスのとれた内容となりました。ポスター発表も大変熱気に包まれ、参加者は180名ほどとなりました。今回私が旭川に赴任して初めての全国学会であったため、医局員一同暗中模索のなか準備をしてきました。

2015年6月5-6日に大雪クリスタルホールにおいて、なんとか開催に至りました。完全な医学系の学会ではありませんでしたので、予算面での不安がありましたが、Leica社、Infocom社、インターリハ社、カンタム・デザイン社、メディカライン社、Guger technology社などの展示を始め、多くの医学関連会社から協賛をしていただきました。当日は旭川の6月では珍しい極寒の天候であり皆学会場にこもっていましたので、むしろ会場は熱気に包まれていました。

当日は私の研究の指導者であるATRフェローの川人光男先生による科学と倫理について、さらにSeoul National University 脳神経外科のChun Kee Chung先生からChronic painと脳内ネットワークのについて講演をしていただきました。さらに韓国からは3題のシンポジウム、教育講演、ドイツからのデバイス開発の大家であるLutz Trahms教授にも基調講演をしていただきました。国内学会でしたが、多くの外国のゲストを招くことができ、大変刺激的な内容になりました。



*旭川医科大学 脳神経外科学講座

川人先生の講演で印象深かったことは、科学の進歩の速度と、それを使う科学者の倫理に解離に関する機具するメッセージがあったことでした。我々は手柄を焦るあまりデータ取得、解析、結果の解釈を都合良く行ってしまう危険が常にあります。これは医学者のみならず、科学を志しているものならば皆心の底に潜んでいる捨てた志です。川人先生は2年前に紫綬褒章を受章されている大変立派な功績を残され、今も精力的に研究を進めています。その先生から科学の進歩の行き過ぎと、超えてはいけない研究倫理について言及していただきました。この講演は大学人、かつ医師である私の心に突き刺さる重いメッセージでした。

さて、今回の学会で私が特にアレンジしたことは旭川医大の学生、近隣の医師には自由に聴講していただけるよう手配しました。そして最後に最も努力したのは一日の疲れを癒すためのレセプションでした。これには“町おこし”を兼ねて興部町（オコッペ）町長と話し合い、その町の名産である蟹、ホタテ、チーズ、ハム、ソーセージなどを大量に寄付していただきました。さらに会の始めに町の宣伝をしたいただいたところ、大量の食材は30分でなくなってしまいました。町おこしを兼ねた企画でしたが、皆が北海道の名産を堪能していました。また、旭川で6-7月しか手に入



らない男山酒造のお酒、ドイツからピルスナーとヴァイスという2種類のビールも輸入しました。最後はこれもあまりやらないのですが、全員でのジャンケン大会となりましたが、幸い韓国からきた女性の神経科学者に可愛いぬいぐるみがあまったことがなによりであったと思います。

学会は決して一人、医局のみで開くわけではなく、皆の協力、暖かいサポートと理解があつてこそ、心に残る、皆が幸せになれる会にできあがるものだと感じました。皆の協力に感謝するとともに、大きな学会を良い思い出とともにおえることができて心から安心しました。

